

G・ファン＝フローテン著
『ホラーサーンにおけるアッバース朝の勃興』訳 (2)

高野 太輔 (大東文化大学国際関係学部)

**De Japanse vertaling van *DE OPKOMST DER
ABBASIDEN IN CHORASAN*
door G. van Vloten (2)**

KONO Taisuke

本稿は、1890年にライデンのE.J. Brill社から出版されたオランダの東洋学者ファン＝フローテンの著作『ホラーサーンにおけるアッバース朝の勃興』(G. van Vloten, *De opkomst der Abbasiden in Chorasán*, Leiden, 1890)の訳文の続きである。

[43]

第三章 ホラーサーンの動乱

ウマイヤ朝が最終的に没落した要因は何であったのかを判断しようとするのは、無益な試みに思えるかもしれない。もし、それがアラブ人の間の不和のせいであり、共同体意識では抑えきれぬほど荒々しい部族間抗争のためであったと言う者があれば、逆に、この王朝の没落はそうした抗争のせいではなく、統治者たち自身の責任で起きたのであって、水面下の争いを鎮めたり、表面化した戦いを収めさせたりする洞察力や政策が不足していたせいであるとの反論が容易になさるだろう。また一方で、ウマイヤ朝政府が打倒されたのは何よりもまず、権威に対する畏敬の念がシーアのプロパガンダによって絶え間なく蝕まれたせいであり、彼らが行動すべき時に武装して行動したことによるのだという声も、考慮されるべきだろう。上記のような原因(相互の不和、後期のカリフたちの無能さ、秘密のプロパガンダ)のうち一つでも欠けていたら、ウマイヤ家が勝利する結果となっていたかもしれない。しかし実際には、これらの原因が複合して、ウマイヤ朝は百年にも満たない統治の後に滅びたのである。

したがって、[44] アッバース家のシーア運動(ここでは特にホラーサーンでの運動を指す)の

急速な進展を正しく説明しようとするならば、その成功の背景となった出来事について、たとえ直接に関係していないものであっても、注目しておくことが不可欠である。

ウマルのカリフ時代にアラブ人の征服を受けて以来、ホラーサーン地方はほとんど絶え間なく内紛に見舞われてきた。その経過を一瞥すると、アラブ人支配者たち相互の特異な関係性を知ることができる。

彼らの中では、北アラブ（ムダル系）のタミーム族、カイス族、[ラビーア系の] バクル・イブン・ワイル族といった部族が多数を占め、南アラブ（ヤマン系）のアズド族⁽⁷⁸⁾は少数派を形成していた。両者の関係が良好である限り、域内の平和は保たれていた。しかし、カリフのヤズィード1世の死後にシリアで部族間抗争が起きると、ホラーサーンでも大規模な無政府状態が生じ、ウマイヤ朝の総督は域外に退去せざるを得なくなった。当時、バクル族は幾分か土地を所有していたが、タミーム族の頭目であるアブドッラー・イブン・ハーズィムがバクル族を追い出し、その指導者を殺して、彼らをヘラートに放逐した。こうしてムダル族（カイス族とタミーム族）と、ラビーア族（バクル・イブン・ワイル族）との戦争が始まった。後者は、アウス・イブン・サアラバを自分たちの頭目に据え、すべてのムダル族をホラーサーンから追い払うように約束させた。アブドッラーは和解を提示したが拒まれたため、ヘラートを攻略してバクル族三千人を殺害し、戦いに決着を付けた。[45]しかしその後、アブドッラーは自部族の人々と争いになり、彼らの多くを殺害してしまった。

アブド・アル＝マリクが西方での困難を乗り越えた頃、ホラーサーンの状況は、アラブ人自身が「このままでは東方の支配権が自分たちから失われてしまう」と感じ始めるほどの混乱ぶりだった。彼らは、諸党派を超越したクライシュ族出身の総督を求めたⁱ。その人物もまた、秩序を回復することはできなかったが、79年になるとハッジャージュによって派遣されたムハッラブⁱⁱが平和を取り戻し、征服活動を起こせるようになった。彼の統治下で、ラビーア族はムダル族の圧力に対抗して、南アラブの諸部族（主にアズド族）と同盟を結んだようである。最初の親善活動は、アブドッラー・イブン・ハーズィムがバクル族を抑圧した後にすでに起きていたと思われる。この両部族は、ムハッラブの死後に同地方の統治を引き継いだ息子のヤズィードとも密接な関係をもった⁽⁷⁹⁾。

それ以降、イラク総督の任命するアミールがヤマン系かムダル系かによって、どちらかが有利になることもあれば、双方が不利になることもあった。ヒシャームのようなカリフの支配下では、アミールが弱者を犠牲にして自らの権威を維持するための材料を充分にもっている限り、公然たる戦闘は稀であった⁽⁸⁰⁾。[46]しかし、その怨念は表面化していないだけで、あらゆる機会をとらえて持続しながら強まっていった。部族間の確執を背景とする事件が起きたような場合には、なおさらである。劣位に置かれた党派は失った権力を取り戻そうと動くのが常であったから、分裂が改善さ

ⁱ Tabarī, II, 860. その結果、ウマイヤ家のウマイヤ・イブン・アブドッラー Umayyah b. 'Abdallāh b. Khālid b. Asīd が任命された。

ⁱⁱ ムハッラブ・イブン・アビー・スフラは南アラブ（ヤマン系）のアズド族出身。

れることはなかった。みずからの資質と行動によって同族の上に立っている人物は、野心的な計画を実行するのに必要な支持者を必ず見つけることができた。このように共同体意識が欠如しては帝国の繁栄が危うくなるとか、信仰の拡大が頓挫するかもしれないといった配慮はどこにもみあたらず、彼らとその支持者がそうした長期展望に立って公然たる反乱を思いとどまるなどというようなことは、望むべくもなかった。

こうした悪弊から最も縁遠かったにもかかわらず、最も苦しめられることになったアミールが、キナーナ族に属するライス族の人サイヤール・イブン・ラーフィウの息子ナスルであった。

シリア、イラク、メソポタミアⁱⁱⁱの西方地域では、ウマイヤ朝最後のカリフであるマルワーン・イブン・ムハンマドが、次々と現れる新しい障害にもくじけることなく、困難を乗り越えようと熱心に取り組んでいたが、前任者たちの役立たずぶりのせいで、もはや事態は最悪となっており、ウマイヤ家の下で崩壊していく帝国を維持することは不可能になっていた。東方でも、最後の総督が迫り来る災厄を防ぐために粘り強く努力はしたが、やはり無駄に終わることになる。

ナスルは、トランスオクシアナの荒々しいトルコ諸族との数々の戦いにおいて、ホラーサーンで最も経験豊富な指揮官の一人であり、ムスリム軍が危地を脱したのは彼の手腕によるところが大きかった。[47] 彼は、トランスオクシアナがほぼ完全に反乱状態にあったアシュラス・イブン・アブドラーのアミール期(109～111年)にサマルカンド知事となり、大きな信頼を得ていた。アースィム・イブン・アブドラーの時代(116～117年)には、バルフで同じ役職に就いていた。

伝えられているところによれば、二度目のホラーサーン総督を務めていたアサド・イブン・アブドラー・アル＝カスリーが120年に亡くなると、カリフのヒシャームはアブド・アル＝カリーム・イブン・サリート・アル＝ハナフィーに、誰を後継者として任命すべきか相談したという。アラブ人が好むあらゆる美德を備え、部族内で大きな影響力を持つ人物の名前がたくさん挙げられたが、ヒシャームを満足させることはできなかった。アブド・アル＝カリームは、言った。「私はナスルを最後まで残しておきましたが、彼こそはすべての者の中で最も男らしく、最も指導力があり、最も行政に精通しています。」ようやく彼の名前が出たとき、カリフは「その人物だ」と言った。「一点だけ目をつぶりさえすれば、彼こそは節度と経験と知性の持ち主です。」「それは何だ?」と、ヒシャームは尋ねた。「彼の一族が弱小なのです^{iv}。」「私[の支持]よりも一族[の助け]の方が重要だと言うなら、私自身が彼の一族になればよい」と、カリフは彼を叱りつけた⁽⁸¹⁾。

このような発言がヒシャームの口から出たことは重要である。カリフに疑念を抱かせようとイラク総督ユースフ・イブン・ウマルが手を尽くしたにもかかわらず、後々までナスルを政権内に留めたことは、彼がそれを忘れていなかったことを示している。ヒシャームの時代と、その後継者ワリード2世の時代、ホラーサーンの情勢は平穏で、ナスルはトランスオクシアナの平定に集中して取り

ⁱⁱⁱ ファン＝フローテンはアラビア語のジャズイーラ地方(al-Jazīrah)をメソポタミア、ジバル地方(al-Jabal al-Jibāl)をメディアと訳出している。

^{iv} ファン＝フローテンはTābarī, II, 1660の原文にある「ホラーサーンでは(bi-hā)」という限定句を訳出していない。

組むことができた。[48]その後、シリアではヤズィード3世の反乱が起こった。ナスルは、ヤズィードの支配が長続きしないと悟っていたのか、ヤズィードがホラーサーンを任せようとしたイラク総督マンスール・イブン・ジウムフルに管轄を明け渡さなかった。後者には要求を押し通すだけの余力がなかったため、ナスルはダマスカスでより強力な統治者が秩序を回復してくれるのを期待しつつ、独立した立場を貫くことができたのである。そのためには、諸々の党派、特にヤマン族とラビーア族をコントロールできなければならなかった。

ナスル自身はキナーナ族の生まれでムダル族に属していたので、この部族は当然ながら彼の味方になってくれた。彼はヤマン族やラビーア族に重要な行政職のポストを与えることで、彼らを取り込もうとした⁽⁸²⁾。当初、人々は彼に忠誠を誓っているように見えた⁽⁸³⁾。タバリーは、バクル族(ラビーア系)の男がすべてのバクル族とその同盟者たち(おそらくヤマン族)の目の前で、ナスルに敬意を表して詠った詩を、残している。詩人は言う、「この表敬 *huldiging* は [気まぐれではなく]、指も塗らないうちに夫のもとへ急ぎ、婚資金が支払われないうちに夫の腕に身を投じるような女の結婚とは違う」と⁽⁸⁴⁾。[49]彼らがこうした態度に踏み切ったのは単なる思いつきからではなく、慎重に検討した上での行動だったようである。

しかし、少なくとも当面の間はカリフから正式に任命を受けて自分の権威を確実にすることができない上に、帝国中心部との関係が断たれたことで中央からの支援も一切得られなくなったことから、ナスルの状況はより厳しいものとなった。その結果は、すぐにあらわれることになる。

ナスルは国庫の金をすべて部隊の間で分配し⁽⁸⁵⁾、もともとはカリフのワリード2世に贈る予定だった大量の金銀の食器までも放出したが、未払いの給料をカバーするには不十分だった。そのため、騒動は兵士の反乱から始まった。

メルヴの大モスクで、権力者の代理人としてアミールが金曜礼拝を行っていたとき、[ヤマン系]キンダ族の男が大声で俸給を要求した。次の週にはその叫び声が大きくなり、バクル族の者たちも声を上げた。商人たちは不安に駆られて自分の店に駆け戻った。堪忍袋の緒が切れたナスルは、言った^v。「今日から先、貴様らに渡す金はない。貴様らのやっていることは、ラクダなり衣服なりを手に入れた兄弟だか従兄弟だかのところへ行ってその顔を殴り、『それは俺の御主人様 *maula* のものだ、俺の養父のものだ』と言っているようなものだ。そう、貴様らの間には取り返しのつかない悪が生じている。貴様らはまるで、道端に寝転がって殺されるのを待つ羊のようだ。歳月を経て飽きられない政府など無い。[50]覚えておけ、ホラーサーンの民よ。貴様らは、敵に対する武装した拠点である。貴様らの間に不和を起こさないように注意せよ。」最後に、彼は詩人の言葉を引用して締めくくっている。「自分の邪悪な性質に流されるがよい、少なくとも私はお前の幸福のために努力した⁽⁸⁶⁾。」

もちろん、騒動はヤマン族やラビーア族から起こされたものであり、ナスルの演説に表れた落胆

^v Tabarī, II, 1856. C.Hillenbrand の英訳を参照 (Hillenbrand, C., *The History of al-Ṭabarī, vol. 26: The Waning of the Umayyad Caliphate*, Albany, 1989, pp.221-2)。

や、至極もつともな怒りの感情は理解できる。アミールは、部族間の抗争が必然的に国を破滅に導くことを予見していたからだ。反対派の先頭に立っていたのは、アズド族出身で、ヤマン系諸族の間では最も影響力のある人物の一人、ジュダイイ・イブン・アリー⁽⁸⁷⁾・アル＝キルマーニーだった。彼の父親はムハッラブと共にアズラク派と戦ったことがあり、彼自身はキルマーンでの生まれで、純血のアラブではなかったようである⁽⁸⁸⁾。彼がアミールに反抗した理由は、以前アサド・イブン・アブドラー^{vi}の下でキルマーニーの協力を得ていたナスルが、彼からリアーサ（部族の指導権）の地位を奪ったというものであった。しかし、彼の敵対的な態度の最大の理由は、野心を傷つけられたことにあるようだ。アル＝キルマーニーは、アサドの死後しばらくの間、同地方の責任者を務めていたが⁽⁸⁹⁾、すぐにナスルに交代させられたのである。

その後、同族のマンスール・イブン・ジュムフル^{vii}がイラクに赴任したことによって [51]、アル＝キルマーニーはナスルに替わってホラーサーンを任されるのではないかという、根拠が無くもない期待を抱いていたのかもしれない。実際、彼に任命書を渡すための使者も向かっていたが、ナスル側の追求を恐れて彼には届かなかったようだ⁽⁹⁰⁾。しかし、彼はトップに立つという望みを捨てなかった。敵側から伝えられている情報ではあるが、ユダヤ教徒やキリスト教徒の支持があれば最高権力者になれるのなら、ユダヤ教やキリスト教に改宗することもためらわなかっただろうと、なりふり構わぬ彼の権力欲が伝えられている。

彼の反乱は野心と部族間対立から引き起こされたものにしか見えないため、アル＝キルマーニーが純粋なアラブの排他主義を体現していたのだとすれば、彼が演じた役割を理解するには何の困難もない。しかし、そうだとすると、これに附随して起きた、ホラーサーンのウマイヤ朝にとってアル＝キルマーニーに劣らず有害な主唱者による反乱の性質を正確に把握することは容易ではない。ここで私は、ハーリス・イブン・スライジュ^{viii}を念頭に置いている。

この人物がホラーサーンで活動するのは初めてではない。すでに 116 年に、彼はウマイヤ朝の総督と対立して、州都メルヴを脅かしたことがあった。しかし、政府は彼の州都への攻撃を撃退することに成功し、トハリスタンの山中に退却させた。そこで彼は、ムスリムでありながら異教徒のトルコ人と同盟を結び、仲間であるはずの信徒を相手に戦ったのである。

報告によると、ナスルの統治下でアル＝キルマーニーとその仲間が反乱を起こしたとき、このアミールはハーリスがトルコ人の軍勢を率いて侵攻して来て [52]、メルヴでの彼の地位に終止符を打つのではないかと恐れたという。彼は使者を送り、恩赦を約束してハーリスをメルヴに連れ帰っ

^{vi} ヤマン系バジーラ族。ホラーサーン総督の地位にあったのは、ヒシャーム治世の 724～728 年と 730～738 年。

^{vii} 744 年にヤズィード 3 世によってイラク総督に任じられたヤマン系カルブ族の人物。すぐにアブドラー・イブン・ウマルに交替させられ、後者はナスル・イブン・サイヤールをホラーサーン総督として認めた。ファン＝フローテンはキルマーニー（アズド族）の「同族 *stamgenoot*」と書いているが、同じヤマン系ではあるものの同族ではない。

^{viii} ウマイヤ朝時代末期にホラーサーンで蜂起したムダル系タミーム族の人物。734～6 年に最初の反乱を起こした後、トルコ系諸族の間に逃れ、745 年にナスル・イブン・サイヤールの説得を受けてメルヴに帰還した。その後、再び叛乱を起こすが同盟相手のアル＝キルマーニーと対立して 746 年に戦死する。

た⁽⁹¹⁾。

さて、ハーリスは何を求めていたのだろうか。

彼はムルジア派であり⁽⁹²⁾、コーランとスンナに従って行動するほかに、預言者の一家から出るはずの「望まれたる者」を尊重したいと考えていたと言われている⁽⁹³⁾。彼は、後にアッバース朝が採用することになる黒い服を着ていた⁽⁹⁴⁾。[53] また、シーア派の詩人であるクマイト・イブン・ザイドから手紙を受け取り、黒い旗を掲げることも勧められていた⁽⁹⁵⁾。ヤマン族やムダル族に加えて、ベルシャ人の有力者（ディフカーン）たちも彼の最初の反乱についてきた⁽⁹⁶⁾。彼の支持者の一部、すなわち「村から来た者たち uit de dorpen」は、ティルミズの門前で泣きながら「マルワーン家の暴虐について訴える」と言い、ティルミズの人々に自分たちへの合流を求めた⁽⁹⁷⁾。彼の二度目の反乱についてタバリーが記録しているマダーイニーの話は⁽⁹⁸⁾、さまざまに異なる報告から構成されている。そのうちの幾つかはハーリスを、コーランとスンナに従って行動する以外に人生に何も求めない人物、ナスルから提示された行政職を10万（ママ）ディーナールの手当⁽⁹⁹⁾がついているにもかかわらず辞退した人物、そして高価な贈物を貰うとすぐに売り払って代金を友人たちへ平等に分け与える人物、などのように描いている。トルコ人の地から帰ってきたとき、こう言う者があった。「あなたを連れて来て我らの視力を蘇らせ、あなたをイスラムの党派（fi'a）^{ix}と共同体（gamā'a）に戻してくださったアッラーに讃えあれ。」彼はこれに対して、「アッラーに背く者は多くても少なく、従う者は少なくとも多い」と答えたという。彼がナスルに反抗したのは、ナスルには正義 gerechtigheid が感じられないと考えたからである。しかし一方で、マルワーンがカリフになったとき（127年サファル月）、ハーリスは自分の恩赦が取り消されることを恐れて [54]、自分に対する忠誠の誓いを求め、アミールの選出を審議（sjūrā）に委ねるよう要求したことがわかる⁽¹⁰⁰⁾。念のために付け加えておくと、彼は自分自身の綱領（sīra）を書き記させ、この文書を始めとするあちこちで、自分を東方から現れてウマイヤ朝の支配を破壊すると期待されていた黒旗を持つ男として表現させていた⁽¹⁰¹⁾。ハーリスの振る舞いには、迷信的な野心と、ウマイヤ家の支配に対する半分はシーア派的、半分は宗教的な憤りが混じり合った独特の特徴を見ることができる。前者については、黒い色に関連して附論で別個に論じることにするが、後者は確かにアッバース家のダーイーたちが政府への反抗を民衆に煽った結果であり、そのために預言者の家から出るはずの「望まれたる者」が最初の反乱時に混じり込んだのである。イブン・ハルドゥーンが伝えるところによると、それらの影響を受けたシーアの伝承によれば⁽¹⁰²⁾、預言者は次のように言ったという。「オクソス川の向こう側からハーリスという男が来るだろう……。その男は、クライシュ族が預言者のために道を用意したように、ムハンマドの家族のために道を用意するだろう。その者こそは、すべての信者にとって助ける義務がある人である。」

ハーリスは、政府側にとって厄介なことに、主としてタミーム族から成る支持者たちを従えて、

^{ix} この個所のほか、57頁でも fi'ah は fi'a と長母音で転写されている。ド = フーユ編のライデン版刊本 (Tabari, II, 1888) では、この語が **فَيْئَة** と綴られている。

離れた野営地に陣取った。「公正な」役人を任命するなど、この面倒な狂信者の要求に応えようとするアミールの試みは失敗に終わり [55]、ナスルは自分の周囲で裏切りが起きることを恐れ、政務室や武器庫を町の中に置いておくのはもはや安全でないと考えて、それらを要塞 (Qūhendiz) に移した^x。そして、恐れていたことが起きた。すでに町への侵入を果たしていたハーリスは、市街戦の末にナスルに追い払われると、支持者ともどもアル＝キルマーニーを頼ったのである。キルマーニーは、まだアミールとの間に公然と戦闘を始めてはいなかったものの、ヤマン族の支持者たちを従えて政府との交渉を一切打ち切り、メルヴから1パラサングの距離にあるバーブ・マーサルジャサーン (Bābmāsergāsān) に陣を構えていた。

最終的に、両者は別々の方向から町に突入した⁽¹⁰³⁾。騒ぎが決着したのは、三日後のことである。[攻撃側の] 闘争心は旺盛で、建物の壁を壊して陣地を確保することも辞さなかった。ナスルの傭兵たちは屋根の上から矢を浴びせられ、投石器からは彼のテントに向かって石塊が投げ込まれた。まだ政府が形を保っていた時期にその味方をしてきたムダル族も、州都の所有権が危ういことは理解していた。そして、「ハーリスが市場⁽¹⁰⁴⁾を占拠した」「片手を斬られた男の息子⁽¹⁰⁵⁾(ナスル)が殺された」と誰かが叫ぶにいたっては、もはや自分たちにチャンスが残されていないことを悟り、撤退を決めるしかなかった。彼らが無事に退却できたのは、同族を思いやる気持ちからだったのか⁽¹⁰⁶⁾ [56]、あるいはアル＝キルマーニーに対する古い恨みからだったのか、ハーリスがそれ以上の戦闘を控えたために過ぎなかった⁽¹⁰⁷⁾。

この敗戦のあと、ナスルは二人の敵の連合軍に対して自分が無力であること、ムダル族全員を味方につけるためには両者を分断する以外に方法がないことを悟った。彼は、それを実現する最も確実な方法は町を去ることだと考え、結果として、その考えが正しかったことが証明される。

アミールが当面の本部をアブラシェフル (ニーシャープール) に置いている間に、メルヴではヤマン族が優位に立つようになった。ムダル族の頭目たちが町を離れてしまい、[ヤマン族への] カウンターパートとして、ハーリスに付いている者しか残らなかったからである。すると、いまや優位な立場を確保していながら、アル＝キルマーニーは躊躇なく、かつての敵対者の家を略奪し、破壊していった。これに対し、ハーリスの支持者からは次のような抗議の声が上がった。

「我々はあなた方に、アッラーを畏れ、アッラーに従い、正しく導かれたイマームを選び、アッラーがあなた方に禁じている流血を控えるように命じる。アッラーは我らをハーリスに従わせることで、神の恩寵に預かる機会を与えてくださり、神の下僕たる人間への親愛の証とされた。それゆえに、我らは財産と血を戦争の危険にさらしたのである。しかし、それは我らが期待するアッラーの報酬に比べれば小さいことであった。我らとあなた方は信仰上の兄弟であり、敵に対抗して互いに助け合う存在である。[57] だからこそ、アッラーを畏れ、その法を尊重せよ。我らは、不法な流血を望んでいないからである。⁽¹⁰⁸⁾」

^x クハンディズ (Quhandiz) はメルヴ市内にあった城塞の名。Ṭabarī, II, 1920 および Williams, John Alden, *The History of al-Ṭabarī, vol. 27: The 'Abbāsīd Revolution*, Albany, 1985, p.31, n.75 を参照。

この記録が本物であるとすれば（私はそう信じているが）、ハーリスの支持者たちの心の動きを知る上で、少なからず役に立つように思える。この言葉には、兄弟であるはずの人々が他の部族から迫害されることに対する明確な抗議が含まれており、敵も味方もひとしくイスラム教徒なのである以上、この迫害は違法、すなわち反宗教的だと訴えている。ハイヤーンの「このアラブ人たちは、神のために戦っているのではない」という言葉にも同じ精神があらわれており、ここでも我々は、ペルシャ・イスラム系、あるいは超イスラム系の一部の人々が、異教的なアラブの感性に反発している様子を見て取ることができよう。彼らは、ハーリス・イブン・スライジュの勢力に加わることで、宗教上だけでなく社会生活においても平等が達成されることを期待していた^{xi}。指揮官にとっては単なるスローガンであっても、その支持者たちにとっては深刻な意味があったのであろう。実際、ハーリスがアル＝キルマーニーに対して十分に強い態度を取らなかったことから、ビシュル・イブン・ジュルムーズをはじめとする多くの者が「義しき党派」(alfia'to l'ādilo) としてハーリスから離れ、攻撃を受けない限り、つまり単なるアサビーヤのためには戦わないと宣言している⁽¹⁰⁹⁾。とはいえ、ハーリスとアル＝キルマーニーが共に背教者 *afvallige* に立ち向かったとき、前者はかつての仲間を攻撃しなければならないことを恥じていた。和平交渉を口実に [58]、ハーリスは「アル＝キルマーニーから」離れて彼らと合流し、アル＝キルマーニー軍のムダル族も全員それに続いた。

数日間の小競り合いの後、メルヴの外壁と城壁の間で決戦が行われ、ハーリスとビシュルは共に戦死した⁽¹¹⁰⁾。

ハーリスの死によって、公正を奉ずる立場からウマイヤ家のカリフを攻撃していた人々は敗北した。しかし、彼らの反乱を鎮めたのは、政府自身ではなく、部族間抗争の代表者である叛徒のアル＝キルマーニーであった。そのため、当局の影響力が増大する結果とはならず、兄弟どうしの闘争が終結する見通しは依然として立たなかった。

ホラーサーンのアラブ人、いや帝国全体がある種の狂気に支配されているかのようであった。あらゆる秩序から逃れ、荒々しい戦争にのみ慰みを求める狂気である。詩人のハーリス・イブン・アブドラー・アル＝ジャアディーは、この状況を見事に表現している⁽¹¹¹⁾。

夜に肘をついて、一番星が巡り出すのを眺めながら、
 アッラーに仕える全てのものを取り巻く悲惨な不和に思いをはせる
 ホラーサーンでも、イラクでも、シリアでも、それは全てを掴んで引きずり回し、
 人々の顔を黒く、その薄暗い渦の中に染める [59]
 軽薄だと非難されていたはしゃぎ屋は、賢者のように扱われる
 女たちが腹の子を流産してしまうほどの悲しみが男たちを襲う

^{xi} Tabarī, II, 1932 には「ハーリスの支持者たち (aṣḥāb al-Ḥārith)」がペルシャ人であるとは書いておらず、内容からも人種間の平等達成が目的といったような文脈は読み取れない。直後に出てくるビシュル・イブン・ジュルムーズもタミーム族に近いダッバ族出身のアラブ人であり、ファン＝フローテンの主張は強引すぎるように見受けられる。

滅びの運命が待ち構える不気味な闇の中を、彼らは何も見えぬままさまよい歩く

結末を見届ける者は、誰もそれを言葉にできぬようなものを見る

それはまるで雄牛の唸り声か、夜中に駆けつけた産婆たちの間で子を産む女の叫び声のような状況を正確に見抜いていた僅かな人々の声も届くことはなく、彼らは何か事態を一変させる出来事が起きてくれないだろうかと祈るばかりだった。

ナスル・イブン・サイヤールはニーシャープールで、メッカから来た数人の男と出会った。そのうちの一人であるヤマン族の男に、ナスルは言った。

「貴様の部族の愚か者どもが何をしているのか知っているか。」

「いや、お前の部族の愚か者どもがお前の支配下で長々と居座ってきたのは知っている。」

別の男がナスルに言った。

「お前はラビーン族やヤマン族を無視して、自分の部族に全ての仕事を任せてしまったから、奴らが傲慢になったのだ。まあ、ラビーン族やヤマン族にも賢い者と愚かな者がいるし、後者の方が多いはあるがね。」

「貴様、アミール様に向かって何という口の利き方だ？」と詰め寄る者があったが、ナスルは「捨て置き、奴の言う通りだ」と答えた。

このとき、メルヴ近郊から来たホラーサーン人が口を開いた。

「アミールよ、あなたの帝国はここで終わりです。大いなる出来事が迫っています。正体不明の男が現れ、新王朝の先触れとして黒い色を掲げ、事態を掌握するでしょう。そして、あなたはその結末を不安そうに見守るしかないのです。」(Tab II, 1929 f)。

[60]

第四章 アブー・ムスリム

新しい秩序が打ち立てられ、そのために謎の男が手を貸すという噂は、本当に広まっていたのだろうか？

のちほど明らかにする通り（附論1）、全くありえないというわけでもない。アッバース家のダーイーたちは、あらゆる方法でこの話を脚色し、ウマイヤ朝が終焉を迎えるという認識を広め、それが間近に迫っていると喧伝していたからである。いくつかの出来事が、これを後押しした。クーファで起きたアリー家のザイド・イブン・アリーの大反乱（ヒジュラ暦121年）と、その息子ヤフヤーのホラーサーンにおける反乱（ヒジュラ暦125年）は、人々の心に大きな影響を与えた。おそらく誇張ではないと思われるが、マスウディーによれば、ヤフヤー・イブン・ザイドが亡くなった年にホラーサーンで生まれた子供はみな、ヤフヤーもしくはザイドと名付けられたという⁽¹¹²⁾。それほどホラーサーンの人々は大きな悲しみにつつまれたのである。

目下のアッバース家によるプロパガンダにとって、これらの出来事は二つの意味で有益だった。

第一に [61]、ウマイヤ朝が預言者の一家に対して慈悲を示すことは期待できず、その専制ぶり

は最も神聖なものですら、ためらわずに踏みにじるということがはっきりとした。アリー家と預言者を結ぶ絆は神聖なものであったからである。ウマイヤ朝に対する嫌悪感は、彼らに味方することを不信仰に等しいと見なすほどになった。アブー・ムスリムは、ムスタヒル・イブン・クマイトにこう言っている。「あなたの父は、ムスリムになった後で不信仰者となった人物だ。クマイトは最初にハーシム家の詩を作り、次にウマイヤ家のことを詠ったからだ⁽¹¹³⁾。」この観点からすると、ハリス・イブン・スライジュのような人物がトルコ人のもとに走ったことは、何ら驚くべきことではない。彼は、ウマイヤ家とその総督たちが、自分の与する異教徒たちと何ら変わらないという理屈を持ち出して、敬虔な人々に抗弁することができた。前述したアリー家の人々の死によって、そうした考え方に新たな材料が加わった。ダーイーたちがこれに一枚噛んでいたことは言うまでもない。

しかし、ザイドとヤフヤーの死には、もう一つの影響もあった。

前者は、もともと自分が名誉を得ていたクーファで反乱を起こした。歴史家⁽¹¹⁴⁾が言うように、彼は自分こそが「アッラーが勝利を約束した男 (al mançūr)⁽¹¹⁵⁾」であり、自分が決起する時こそがウマイヤ朝の崩壊を決定づける「その時 het tijdstip」であると確信していた。

ザイドの反乱が有名な悲劇的結末を迎えたとき、彼の支持者たちは皆、期待していた人物がアッラーの望むマフディー [=救世主] ではなかったことを知った。そのため、敵からはこんな言葉が聞こえてきた。[62]

我らは汝らのザイドを椰子の樹に磔にした

マフディーが椰子の樹に磔にされたなど聞いたこともない⁽¹¹⁶⁾

続いてザイドの息子ヤフヤーが不幸な最期を遂げたときも、預言者の家族のこの家系が天命を授かっているかどうかについて、信頼はかなり低下したに違いない。抜け目ない扇動者たちにとって、友好的な人々の目をアッバースの子孫に向けさせることは難しくなかったであろう⁽¹¹⁷⁾。もちろん当面の間は、慎重に、遠回しに、捏造された verdicht 伝承や予言を用いつつ、預言者の一家全体の連帯を前提にしてではあるが。

歴史家のヤアクービーは⁽¹¹⁸⁾、ザイド・イブン・アリーの後、ホラーサーンでの宣教活動が再び活発になったと語っている。「夢見が占われ、予言書 (malāhim^{xii}) が読まれ、朗読され、解説された。」

すでにイマームは、ホラーサーンのシーアから集められる献金を定期的に受け取っており、財産の5分の1^{xiii}が徴収されたという記録も存在している⁽¹¹⁹⁾。毎年、小さな隊商がメッカに赴き、現金や高価な織物などの貢ぎ物をイマームに届けていたようだ。数人のナキーブが率いるこのような隊商は、ハッジの時期であれば政府の疑惑にさらされることが少なかった。というのも、遠方からの巡礼者の多くが、ハッジを利用して様々な取引を行っていたからである⁽¹²⁰⁾。[63]そのためイマームはメッカに赴いて献金を受け取り、東方の情勢について話を聞き、それに合わせて計画を練った

^{xii} malāhim のこと。ファン＝フローテンはアラビア語を転写するにあたって h や t などの下点は使っていない。

^{xiii} 公益のために戦利品などの5分の1 (フムス khums) を徴収する権利はカリフに認められたもの。

のである。

スライマーン・イブン・カスィールと三人のダアワの頭目がこうした目的のために聖地へ赴いたのは、124年のことであった。旅の途中で訪れたクーファには、アッバース家のプロパガンダをしたという罪で、イジュル族のアースィム・イブン・ユヌス^{xiv}が投獄されていた。獄中の彼を訪ねると、彼と一緒にマアカルの息子イーサーとイドリースという二人の同族の男が捕まっていた、これにアブー・ムスリムという馬具屋の若者が仕えていた。一行は、彼が予言書に書かれているある種の吉兆を身に帯びていることに気付いた。しかも、この若者はすでにダアワに取り込まれていた。彼の主人たちが預言者の一家に対して行われた不正について語り合ったとき、彼は涙を流してプロパガンダに加わったからである。

ホラーサーンからの一行はメッカでムハンマド・イブン・アリーと落ち合い、アブー・ムスリムについて見たことを話した。「その人物は自由民なのか、奴隷なのか？」とムハンマドは尋ねた。「イーサーは彼が奴隷だと言っていますが、本人は自由民だと言っています。」そこでイマームは、アブー・ムスリムを買い取って解放し、自分の家のマウラーにするように命じた。

アッバース家の覇業に比類なき貢献をすることになる傑物がシーアと接触した時の様子を、タバリーは以上のように伝えている⁽¹²¹⁾。[64]しかし、この物語には解決すべき点が幾つかある。アブー・ムスリムは、イジュル族の男たちに仕えていたということ以外、彼らとは何の関係もなく、牢屋の中で知り合い、運動に引き込まれただけのようだ。これは彼が馬具屋と呼ばれていることとも一致する。しかし、その続きを読むと、彼はどういうわけか彼らの奴隷となっており、その出自についても彼らが何かを知っているようである。

さて、この伝承はアブー・ムスリムの出自に関する唯一のものではないが、私たちはこの伝承と他の幾つかの伝承との間で選択を迫られている。

イブン・アル＝アスィールによれば⁽¹²²⁾、彼はもともとイスファハーンかメディア⁽¹²³⁾のどこかに住むイジュル族の一派、バヌー・マアカルの土地の出身であり、本名はイブラーヒームだが、ハイカーン Hajkân⁽¹²⁴⁾と呼ばれていたという。彼は父によって、イスファハーン、メディア、メソポタミア、モスル、ニシビス、アーミドなどで皮革の取引をしていたイーサー・イブン・ムーサー⁽¹²⁵⁾なる馬具屋に預けられたと言われている^{xv}。彼はクーファで教育を受け、その獄中でイジュル族の男たちと出会ったという。また、別の伝承では、この馬具屋との関係については何も触れていないが [65]、彼がクーファのサワードにあるフタルニーヤ Chotarnia の出身で、アッバース家と接触するまでは、イジュル族のイドリース・イブン・マアカルのカフラマーンすなわち家令であったと記されている⁽¹²⁶⁾。マダーイニーは⁽¹²⁷⁾、ムハンマド・イブン・アリーがイジュル族の男たちから彼

^{xiv} イジュル族はラビーア系バクル・イブン・ワイル族の下位集団。

^{xv} ファン＝フローテンはイブン・アル＝アスィールの『完史』124年の記事に出てくる複数の異伝を区別しておらず、雑な要約となっている。イスファハーンほかで皮革の取引をしていた云々という伝承に出てくる名前はアブー・ムーサー・アッ＝サッラージュであり、イーサー・イブン・ムーサー・アッ＝サッラージュとあるのは別伝承である。

を買い取ったあとで、馬具屋のアブー・ムーサーのもとへ行かせたとしている^{xvi}。また、彼はホラーサーンのヘラートまたはブーシャンジュ Busjeng の出身で、主人によってイマームに売られたとも⁽¹²⁸⁾、イマームに捨て子として引き取られたとも言われているが⁽¹²⁹⁾、その一方で彼は自由民であり、ホスロー・アヌーシルワーン⁽¹³⁰⁾の有名な宰相であったズズルグミフルの子孫であるとか、ヤズデギルド⁽¹³¹⁾の子孫であったとも言われている。

このように諸説ある中から、蓋然性の高いものを選び出すことは難しい。分かることがあるとすれば、それはアブー・ムスリムが、ヤズデギルドやズズルグミフル [の子孫] どころか、[66] 非常に出自の曖昧な人物であり、純粋なアラブ人の血を引いていない可能性が高いということである。彼が公然と活動を開始したとき、若者たちがこの風変わりな男の血筋について尋ねると、彼はこう語った。「血筋については、私について言われていること (chabari) だけで十分です。⁽¹³²⁾」実際、彼はごく普通に「アアジャム A'gam (ペルシャ人)」と呼ばれており⁽¹³³⁾、ある風刺家などは詩の中で彼をクルド人扱いしているほどである。

アブー・ムジュリムよ⁽¹³⁴⁾、アッラーは、しもべ自身が変わらぬ限り、
しもべに対する慈悲の心を変えない
汝は、マフディー (カリフのマンスール) の御代を裏切ろうとしたのか
そう、裏切りは汝のクルド人の父親にお似合いだ⁽¹³⁵⁾

彼がアッバース家の支持者と知り合う前にクーファに住んでいたことは、それが獄中であったにせよ、そうではなかったにせよ、別の記述からもはっきりしている。

119年、イラク総督ハーリド・アル＝カスリーは、アリー家の反乱を扇動したムギーラ・イブン・サイードをクーファで火炙りにした⁽¹³⁶⁾。その支持者の中に、マーリク・イブン・アアヤン・アル＝ジュハニーという人物がいて、ハーリドの前に引き出された後、何とか無罪を勝ち取った。語り手が続けて述べるには、彼が信頼する仲間と一緒に集まったとき (その中にはホラーサーンから来た当のアブー・ムスリムもいたのであるが)、マーリクはこのように言った。

私は奴のために、二つの道の間に道を作り、太陽に泥を塗った [67]
奴が私を尋問したとき、私は奴を煙に巻いてやった
なぜなら、スィーンの文字とシーンの文字は区別が曖昧だからだ⁽¹³⁷⁾

アブー・ムスリムは権力を握ったとき、「もし奴を見つけたら、あの告白ゆえに奴を殺してやる」と言ったという⁽¹³⁸⁾。

この報告では、アブー・ムスリムもムギーラの支持者である「アル＝ウサファー al wosafā' (召使)」の一人であったという可能性が残されており、少なくともすでにクーファのシーアとは関係があったと考えられる。

^{xvi} Tabarī, II, 1726 にある同伝承によると、獄中のブカイル・イブン・マーハーンがイジュル族のイーサー・イブン・マアキルからアブー・ムスリムを買い取ってアッバース家の (ムハンマド・イブン・アリーではなく息子の) イブラーヒームに贈り、イブラーヒームは彼を (アブー・ムーサーではなく) ムーサー・アッ＝サッラージュに預けて様々な教育を施したとある。ファン＝フローテンの要約は人名の表記に混乱が見られる。

同じように不確かなのが、彼がイマームと接触した時期である。アブー・ムスリムがムハンマド・イブン・アリーに会ったとする史料もあれば⁽¹³⁹⁾、彼の息子イブラーヒームに会ったとする史料もある⁽¹⁴⁰⁾。しかし、アブー・ムスリムがイマームのイブラーヒームと出会い、イマームから馬具屋のアブー・ムーサーに訓練を託され、その後、イマームのために何度もホラーサーンまで往復したというマダーイニーの話は⁽¹⁴¹⁾、信用できない。イマームのムハンマドが亡くなったのは125年末のことで⁽¹⁴²⁾、父アリーの死からわずか7年後のことであった。128年にはアブー・ムスリムがホラーサーンでダアワの指導者の地位に就いているので、まず初めにアブー・ムーサーから訓練を受けたとすると、彼が同地に行き来する余地はあまりないはずである。アブー・ムスリムとマーリク・イブン・アアヤンとの関係についての上記の説明が真実であれば、彼がアッバース家と接触したときの年齢はそれほど若くはない。[68] したがって、彼がヒジュラ暦100年に生まれ⁽¹⁴³⁾、24歳でアッバース家の宣伝員と接触したとする報告や、28歳あるいは33歳としている報告は、信頼に値する⁽¹⁴⁴⁾。

アブー・ムスリムがムハンマド・イブン・アリーにも会っていたとすると、後者がすぐに亡くなった後、彼を待ち受けている任務への準備は、ムハンマド・イブン・アリーがイマームの地位を譲った息子のイブラーヒームに全面的に委ねられたと考えるべきであろう。

新イマームはこの青年の中に、預言者の一家に対する限りない献身と、強い意志、明確なビジョン、そして一個の軍隊よりも価値がある忠誠を見出したのであろう。彼を解放したことはその第一歩であり、それによって彼は家族の一員となっただけでなく、パトロン⁽¹⁴⁵⁾の期待を担う支持者にもなったのである。

今や、この抜け目ないアッバース家 [の当主] にとって、自分にはカリフとなる権利があることをアブー・ムスリムに信じさせ、自らの利益に従わせることは、容易であったに違いない。[69] つまり、イマームの意志を実行するためには、その他のあらゆる考慮を捨て去らなければならないという意味で、彼の利益に従順となったのである。その準備の一端を垣間見ることができるのは、アブー・ムスリムが死の直前にカリフ・マンスールに宛てて書いたとされる手紙である。

彼はこう書いている。「私は、ある人物を模範 (imām) とし、アッラーが被造物に与えた命令の案内役としました。彼は深く知識に精通し、預言者と近親関係にありました。しかし彼は、アッラーが被造物に与えるわずかなもの (世俗的な利益) を熱望するあまり、私がコーランについて無知であるのをいいことに、(誤った解釈によって) コーランをねじ曲げてしまいました。こうして彼は偽りの表現で惑わし^{xvii}、剣を振るい、憐れみを捨て、謝罪を受け入れず、罪を赦してはならないと命じました . . . 。⁽¹⁴⁵⁾」

この手紙が本物かどうかは別にして、イブラーヒームがアブー・ムスリムに対して行使した方法

^{xvii}Tabarī, III, 105 の原文は fa-kāna ka-lladhī dulliya bi-ghurūr で、「アッラーが被造物に与えるわずかなものを熱望するあまり」を受けている。J. D. McAuliffe も "like one enticed by illusion" と訳しており、ファン＝フローテンの誤訳と思われる (McAuliffe, Jane Dammen, *The History of al-Ṭabarī, vol.28: 'Abbāsīd Authority Affirmed*, Albany, 1995, p.26 を参照)。

と、彼に与えた命令についての真実を物語っていることは間違いないように思える。まず、イブラーヒームが真のイマームであることが証明され⁽¹⁴⁶⁾ [70]、次に彼への服従が至高のものとして提示され⁽¹⁴⁷⁾、ひとたび支持者が主人の掌中で盲従するようになると、政治的には説明できても、道義的には正当化できないような命令を下すことも容易となったのである。

かくして、カリフ国 het kalifaat 全体が崩壊していくことになる128年が始まった。シリア人たちはマルワーン2世に平定されたばかりだったが、その裏でカリフ・ヒシャームの息子スライマーンが新たな反乱を起こしていた。激しい戦いの後、彼は逃げ出してヒムス（エメサ）に拠り、この町でまた数か月間の包囲戦が繰り返された。このようにカリフが労力の無駄遣いをしている間に、イラク全土とメソポタミアの大部分はハワーリジュ派の手に落ちてしまった。メディアやペルシャはジャアファル家のアブドッラー・イブン・ムアーウィヤの支配下にあり、アブドッラー・イブン・ズバイルの死後は平和が続いていたアラビアにも反旗が翻るのはそう遠いことではなかった。ホラーサーンにおいても、政府の立場が絶望的だと考えられていたことはすでに見た通りである。

自分と父親が一貫して推進してきた大運動を、今こそ望ましいゴールに導くべき時が来たのだと、イマームは考えた。

そのための人物こそ、アブー・ムスリムであった。彼はイブラーヒームによってホラーサーン全域とその後の征服によって追加されるであろう地域の責任者に任命され、ヤマン族の助けを借りながらムダル族に対抗するようにとの命令を受けて出発した。なぜなら、ムダル族は政権側であり、彼らの敵を支援することで、当局の権威の失墜とそれに伴うカリフ国の崩壊を早めることができるからである。また [71]、可能な限りアラビア語を「ホラーサーンに」残さないようにとのアドバイスもあった⁽¹⁴⁸⁾。

しかし、アブー・ムスリムがメルヴに到着したとき、スライマーン・イブン・カスィールは彼を認めようとしなかった。報告者によれば、それは彼の年齢が若かったせいで⁽¹⁴⁹⁾、ホラーサーンに出发したとき、まだ弱冠19歳であったという⁽¹⁵⁰⁾。前述の通り、19歳という数字には大きな疑問があり、アブー・ムスリムはもっと年上だったと思われる。そのため、スライマーンの行動を理解するには、別の理由を探さなければならない。これはすぐに分かるだろう。

これまでホラーサーンの運動は、一部クーファからの指導を受けてはいたが、十二人のナキーブが最高評議会のようなものを形成し、イマームに対してのみ責任を負うという独立性を保っていた。このようなナキーブの立場については、ヒダーシュの身に起きたことと関連して、すでに指摘しておいた。その責任者がスライマーン・イブン・カスィールであり、イブラーヒームはアブー・ムスリムが出发する際、あらゆる問題についてスライマーンに相談し、難しいケースの場合にはイマームの判断よりも彼の判断を受け入れるように勧めていた。それにも関わらず、事実として最高権力はアブー・ムスリムの手に渡り [72]、ナキーブの相対的な独立性が終わりを迎えたことに変わりはなかった。この新しい指導者は、他人の都合に合わせながら事に当たるような人物ではなかったからである。

アブー・ムスリムに対するスライマーンの感情は、マクリーズィー所収⁽¹⁵¹⁾の二つの発言から読

み取ることができる。

一つ目は、葡萄の房を手にしたスライマーン・イブン・カスィールが、「アッラーがこの葡萄の房を黒くしたように、アブー・ムスリムの顔を黒くし、彼の血を（この房の果汁のように）私に与えてくださいますように」と言ったというものである。しかし、より重要なのは、スライマーンの二つ目の発言である。「我々は穴を掘ったが、その後、別の人々がやって来て水を流し込んでしまった。」この比喩の意味は明らかだ。スライマーンたちはダアワを組織したが、アブー・ムスリムが来たことで、彼らが築いた土台の上に家を建てるためのリーダーシップを奪われてしまったのである。

上記の発言は、この若者と上手くやっていくことを嫌がったダアワの頭目の気持ちをよく表している。結局、アブー・ムスリムは自分の主人のもとへ帰るしかなくなってしまった。

ある報告によると⁽¹⁵²⁾、彼はメッカに戻り、イマームとホラーサーンの頭目たちの立ち会いのもと、その場であらためて再任を命じられたという。

その際イマームは、アブー・ムスリムを派遣する前に何度も別の者に当該の任務を受けてくれないか打診したと釈明している。打診を受けた者の中にはスライマーン・イブン・カスィールもいたが、彼は受諾を拒んだと言われている。

これまでの経緯を考えると [73]、そのようなことはありそうにないように思える。イマームは、自分が完全にコントロールでき、すべてにおいて信頼できる人物を責任者に据えることを何よりも重視していたはずである。アブー・ムスリムほど、これに最適な人物はいなかった。スライマーン・イブン・カスィールが前もってホラーサーンの統括を任されたにもかかわらず、それを断ったのだとすると、彼の態度は支離滅裂である。

しかも、皆で揃っていったんメッカへ戻ったというような話は、より信頼に値すると思われる別の伝承と矛盾している。

それによると、アブー・ムスリムがメルヴから追い返されたとき、ナキーブの一人であるアブー・ダーウッド・ハーリド・イブン・イブラーヒームはトランスオクシアナにいたため、その場には立ち会えなかった。メルヴに戻った彼は、アブー・ムスリムがイマームから任命された旨を記した手紙を見せられた。アブー・ムスリムはどうしているかと尋ねると、若輩であることを理由にスライマーン・イブン・カスィールによって追い出されてしまったと分かった。

アブー・ダーウッドはすべてのナキーブを召集し、[預言者]ムハンマドが[神に]選ばれて使命を与えられたことに疑義のある者はいるか、ムハンマドが聖なる書物だけでなくそこに隠されたすべての事柄について天使ガブリエルによる靈感を受けていたことを疑う者はいるかと尋ねた。彼らはいずれについても「いません」と答えざるを得なかった。アブー・ダーウッドは続けて、神がムハンマドをお召しになったとき、その知識は彼と一緒に失われたと考えるか、それとも彼はそれを後に残したと考えるかと問うた。もちろん、彼らの答は後者であった。[続けて曰く、]「我々はさらに、その知識は彼の家族 familie と彼の一家 huis の中でのみ受け継がれること、自分についてであれ他人についてであれ、人々の尊ぶ大義が預言者の一族 geslacht とはいえ彼自身の一家以外

からもたらされるなどと考えてはならないこと、そして最後に、彼ら（預言者の一家）は知識の宝庫であり、[預言者] ムハンマドの相続人であることを、認めなければならないはずだ。[74] そうだとすれば、彼らの判断を疑い、彼らの命令に従わない理由は何なのか？ 彼らは、ふさわしくないと思う人物を派遣したりはしなかったはずだ。」——これらの言葉で自分の行動を反省した彼らは、すでにクーミスを越えていたアブー・ムスリムを呼び戻し、彼のことを認めたという⁽¹⁵³⁾。

アブー・ムスリムはスライマーン・イブン・カスィールの敵対的な態度と、この時にアブー・ダーウードが与えてくれた支持を決して忘れなかったと、上記の伝承の作者は付け加えている。確かに、何年か後にアブー・ムスリムが前者を軽微な疑惑で殺させたこと⁽¹⁵⁴⁾ [75]、そしてホラーサーンのもう一人の有力者であるイーサー・イブン・マーハーンがアブー・ダーウードを誹謗中傷する手紙を何通も書いていたとアブー・ムスリムにあばかれて命を落としたことは⁽¹⁵⁵⁾、この主張の真実性を証明している。

[(3) につづく。全5回で完結予定]